

《研究ノート》

## 第一次世界大戦前の岡山県の工業

下 野 克 巳

### 1. はじめに

本稿は1914年12月に岡山県が刊行した『大正二年 岡山県統計書』を中心として、第一次世界大戦前の岡山県の諸産業および工業生産の状態と其中で倉敷地域の主として工業生産の特徴とを考察しようとするものである。ここで倉敷地域というのは、20世紀末期の倉敷市域に該当する地域部分を想定しており、従来の都窪郡の主要な部分と児島郡の西の部分と浅口郡の東の部分とを含んでいる地域を意味している。研究・執筆作業の遅い筆者なので完成までにはもう少し時間がかかるであろうが、本稿は次のような企図の下での一つの整理・分析作業である。

1989年から2005年まで『新修倉敷市史』の編纂と執筆を行うために組織された「倉敷市史研究会」の近代・現代部会に参加する機会を倉敷市によって与えられた筆者は、部会の一員として通史編3巻と資料編2巻との編纂作業に加わった。そして2004年3月刊行の『新修倉敷市史 第6巻近代(下)』と2005年3月刊行の『新修倉敷市史 第7巻現代』とでは、第一次世界大戦期から2000年頃までの倉敷地域の工業・地場産業に関する部分を直接に執筆する機会が与えられた。全体像として完成させるためにはおそらくもう一つ別に20世紀初頭の岡山県と倉敷地域の工業生産とに関する研究ノートが必要になるのではないかと考えているが、それとあわせて本稿でも第一次世界大戦以前の20世紀初期の岡山県と倉敷地域の工業生産の状態を考察することによって、全体として『倉敷地域の20世紀の工業発展』(仮題)という形で研究をまとめていく作業を考えている。その主要な作業内容は、時期によっては全国統計である『工場統計表』も用いることがあるかもしれないが、すでに『新修倉敷市史』で行った『岡山県統計書』と『岡山県統計年報』とを中心にした統計数値などの整理・分析作業とそれを踏まえた歴史的な考察・叙述作業とを改めて検討・充実させることが、その主要な作業の内容となるであろう。

本稿の中心的な整理・分析作業の対象となっている『大正二年 岡山県統計書』では、幸いなことに『新修倉敷市史 第6巻近代(下)』の「第三章 第一次大戦と近代産業」の主として「第一節 重化学工業の成長」で筆者が行った統計数値の整理・分析作業とほぼ同様な作業を行うことが出来る様式(品目など細部では異なっているとしても)で記載されていた。残念ながら、それ以前の『岡山県統計書』ではとくに農業から工業にいたる産業別生産額とその総額が記載されていなかったり、工業生産の記載様式が異なったりしているために、別稿として予定している「20世紀初頭の岡山県の工業生産」(仮題)では、やや異なった整理・分析が必要となるであろう。そこで本稿では、この『大

正二年『岡山県統計書』を中心としつつも明治40年代の『岡山県統計書』から工業生産物（以下では工業製品と記すことが多い）の生産価額に関する数値も補って、第一次世界大戦前の1910年前後の岡山県および倉敷地域に関係する3郡を中心とした産業別（この時期は農産物・畜産物・水産物・林産物・鉱産物・工産物とに別けてあった）生産物価額とその総額および主要な工業製品（この時期には水産物として記載されていた食塩も本稿では含めている）の生産価額の動向・特質を、整理・分析しようと考えている。

つまり本稿の第一の課題は、第一次世界大戦期以後の岡山県と倉敷地域とにおける各産業（農業・畜産業・水産業・林業・鉱業・工業の建設業を除いた第一次産業と第二次産業との諸部門）の生産額と主要製品を中心とする工業の生産額とで工業を中心とする産業生産の状態とを連続的・対比的に考察することが出来るように、1909年から1913年までの第一次世界大戦直前の各産業の生産額と主要製品を中心とする工業の生産額とを整理・分析することである。そして第二の課題は、岡山県と倉敷地域とが第一次世界大戦期以後になると産業生産総価額において工業生産額が中心となるいわば「工業県」的状态の性格になっていくのに対して、第一次世界大戦直前のこの期間は農業生産額が中心である第一次産業の生産額がまだ過半数を占めているいわば「農業県」的状态の性格であったことを明確に整理・分析することである。

## 2. 1910年前後の岡山県の産業別生産物価額

『大正二年 岡山県統計書』には、1909（明治42年）から1913（大正2年）までの岡山県の農産物・畜産物・水産物・林産物・鉱産物・工産物の産業別生産価額とその総価額が記載されていたので、それらを列記しそれぞれの構成比率も算出して表1として整理した。残念ながら『岡山県統計書』には1908年以前の同種の数値と1909年から1912年までの郡市別の産業別生産物価額とが記載されていなかったもので、本稿のような不十分な整理・分析作業とならざるをえなかった。

表1をみてここで述べておくべき第1のことは、第一次世界大戦前のこの時期においては工産物の価額が農産物の価額を上回っているようであるがそれほど大きな差がなく、むしろ逆に1911・12の両年では農産物の価額の方が大きいことである。そして、農・畜・水・林の第一次産業の生産物の合計がすべての年で産業生産物総価額の過半数を占めていて、工産物に鉱産物を加えても最低で46%は超えているものの総価額の半数に達していないということが第2に述べておくべきことである。第3に述べておくべきことは、農産物と工産物との価額は着実に増加しておりその合計が1911年以後は僅かとはいえ90%を超えているという、両方で圧倒的な割合を占めているということである。

つまりこの表1からは、この時期には工産物の価額が産業生産総価額の中でかなり大きな割合を占めるようになってきているとはいっても、筆者が『新修倉敷市史 第6巻近代（下）』の「第三章 第一次大戦と近代産業」の関連する部分で記述した、第一次世界大戦期以降の岡山県の産業別生産額と総価額でのそれぞれの構成比率の状態とはかなり大きな差異があり、まだ岡山県はいわゆる「工業県」といえる状態には到達していないといわざるをえないということであった。

表1 1910年前後の岡山県産業別生産物価額

産業 比率 年次	農産物 比率	畜産物 比率	水産物 比率	林産物 比率	鉱産物 比率	工産物 比率	産業生産総価 額 合計比率	農畜水 林小計 比率
1909 明治42	31,682,315 41.5	1,153,789 1.5	3,097,091 4.1	4,043,221 5.3	1,113,800 1.5	35,194,764 46.1	76,284,980 100.0	52.4
1910 明治43	34,080,768 42.0	1,319,300 1.6	2,992,833 3.7	3,987,131 4.9	1,710,406 2.1	37,045,842 45.7	81,136,280 100.0	52.2
1911 明治44	43,832,865 45.7	1,334,154 1.4	2,938,010 3.1	3,568,585 3.7	1,608,600 1.7	42,573,555 44.4	95,855,769 100.0	53.9
1912 大正元	50,359,136 45.6	1,304,050 1.2	3,084,777 2.8	3,869,800 3.5	2,276,292 2.1	49,651,062 44.9	110,545,117 100.0	53.1
1913 大正2	50,799,289 44.3	1,369,115 1.2	3,063,301 2.7	3,514,428 3.1	3,430,788 3.0	52,407,352 45.7	114,584,273 100.0	51.3

注) 生産物価額は円, 比率は%。

出所) 岡山県『大正二年 岡山県統計書』

### 3. 1913年の主要郡市別の産業別生産物価額

おなじ『大正二年 岡山県統計書』から、当時の岡山県の20の郡市を産業生産物総価額の大きい順に並べると表2のように児島郡・都窪郡・岡山市・浅口郡・上道郡・小田郡が上位の6郡市の位置にあり、この県南の中央部から西部にかけての6郡市の合計で岡山県全体の55.2%と過半数を占めていた。この6郡市の農産物価額の合計が岡山県全体で占めていたのは37.4%であり、6郡市の工産物価額の合計が岡山県全体で占めていた比率の73.9%のほぼ半分であり、産業生産物総価額を中心に両者がちょうど対照的な数値を示している。この6郡市合計の農業生産物価額の岡山県全体での比率の低さは、岡山市の農産物価額が岡山県全体の0.3%しかなく郡市最下位の20位（岡山市の産業生産総価額の中でも1.4%しかない）になっていることが主として影響しているのものであろうが、小田郡の農産物価額も岡山県全体の5.1%で11位となっていることも多少影響しているものと思われる。

それに対して工産物価額では、岡山市は市の産業生産総価額の中で96.9%という県内の他の郡とはまるで比較にならない極度に高い比率を占めるとともに、岡山県全体で占めている比率も21.6%と著しく大きくて断然第1位を占める工業地となっていた。そして、児島郡・浅口郡・都窪郡の3郡の工産物価額もそれぞれ岡山県全体の15~12%を占めており、6郡市の中で最下位の上道郡の工産物価額も岡山県全体の5.6%を占め第6位であった。それぞれの郡市の中で工産物価額が産業生産物総価額の過半数を占める状態に達していたのは岡山市・浅口郡・都窪郡・小田郡の4郡市であり、児島郡は鉱産物と水産物とがそれぞれ10%余りもあったためか工産物価額の比率が48.7%と半数に僅かに及ばなかったものの農産物価額の27.1%より20%以上も大きかった。郡市別の産業別生産物価額の比率で、表1と比較して農産物価額の比率が平均以上で工産物価額の比率が平均以下となっていたのは、この6郡市の中では上道郡のみであった。また工産物価額の上位6郡市は、それぞれの順位までが岡

表2 1913年の主要郡市別産業別生産物価額と構成比

主要郡市名 (県内比率)産業比率	農産物 (県内比)産業比	畜産物 産業比	水産物 産業比	林産物 産業比	鉱産物 産業比	工産物 (県内比)産業比	産業総価額(県 内比率)産業合計	農・工 県内順位
児島郡 (県内比)産業比	4,189,175 (8.2) 27.1	62,880 0.4	1,599,500 10.3	113,764 0.7	1,943,335 12.6	7,533,067 (14.4) 48.7	15,461,721 (13.5) 100.0	2・2
都窪郡 (県内比)産業比	4,527,885 (8.9) 38.6	23,488 0.2	45,765 0.4	52,010 0.4	528,565 4.5	6,540,199 (12.5) 55.8	11,717,912 (10.2) 100.0	1・4
岡山市 (県内比)産業比	168,385 (0.3) 1.4	198,389 1.7	472 0.0	788 0.0	— —	11,305,793 (21.6) 96.9	11,667,797 (10.2) 100.0	20・1
浅口郡 (県内比)産業比	3,473,214 (6.8) 32.7	80,319 0.8	261,945 2.5	115,412 1.1	100 0.0	6,695,416 (12.8) 63.0	10,626,406 (9.3) 100.0	6・3
上道郡 (県内比)産業比	4,002,235 (7.9) 56.6	68,283 1.0	31,826 0.5	26,661 0.4	159 0.0	2,935,408 (5.6) 41.6	7,064,572 (6.2) 100.0	3・6
小田郡 (県内比)産業比	2,615,920 (5.1) 38.7	68,957 1.0	239,325 3.5	145,110 2.1	1,271 0.0	3,694,609 (7.0) 54.6	6,765,192 (5.9) 100.0	11・5

注) 1. 主要郡市名は産業生産物総価額が6位までのもの。価額は円、構成比は%。

2. 農産物価額で第4位は御津郡で第5位は吉備郡であった。岡山県は当時は20の郡市で構成されていた。

出所) 岡山県『大正二年 岡山県統計書』

山県の産業生産総価額の順位とぴったりと対応していたわけではないが、その上位6郡市と一致していた。しかしながら、農産物価額の上位6郡市の中には表2の注にも記したように御津郡（農産物価額は4位であったが産業総価額では8位）と吉備郡（農産物価額は5位であったが産業総価額では7位）とが含まれていた。

つまりこの表2からは、当時の岡山県の産業生産総価額の上位を占めている主要な郡市はほぼ工産物（県南の中央部から西部にかけて成長が目立っていた）の価額で決定されるようになってきていたといっても差し支えないであろう。

#### 4. 1910年前後の岡山県の主要工業製品

つぎに1910年前後の岡山県の主要な工業製品を個別具体的に明確にするために、『大正二年 岡山県統計書』に記載されている1913年の生産価額にしたがって1位から25位までの工業製品を列挙し、1910年前後の他の年の『岡山県統計書』からも可能な限り生産価額を収録して表3を作成した。  
\*印を順位の欄につけた紡績絹糸（県内に9工場）と紡績絹糸（同1工場）とは県・郡市の生産価額の合計数値が記されてなく、各工場ごとの生産量（貫）と生産番手と1梱（48貫）当りの平均単価（紡績絹糸は1貫当りの）とが記されていたので、それに基づいて概算額を計算したものである。また食塩は、当時は水産物の所に記されていたのでその数値を収録した。さらに1907年と1909年とでは、1913年の主要工業製品の生産価額が一部は記載されていなかったので空白にしたが、造船は新造漁船の概価が水産物の所に記載されていたのでとりあえずそれを記載しておいた。

表3 1910年前後の岡山県の主要工業製品の生産価額

工業製品名	1913年産額	同順位	1911年産額	1909年産額	1907年産額
紡績綿糸	16,062,000	※1	11,199,000	11,244,000	13,012,000
綿織物 (織物類)	8,141,568 9,605,025	2	6,060,299 6,984,141	4,039,166 4,636,965	3,594,565 3,687,707)
清酒 (酒類)	6,049,438 6,291,187	3	4,294,017 4,497,277	4,396,096 —	4,294,585 (—)
花菱	2,786,749	4	2,476,762	3,152,434	3,417,055
醤油	1,710,224	5	1,674,219	1,509,572	972,559
生糸 (蚕糸類及真綿)	1,438,468 1,491,019	6	1,273,077 1,343,510	1,178,750 1,209,925	1,373,935 1,412,973)
足袋	1,375,048	7	1,815,328	955,567	1,014,745
麦稈真田 (麦稈経木真田)	1,291,291 1,494,780	8	1,747,670 2,452,517	1,442,050 2,112,959	1,415,839 1,523,399)
人造肥料	1,268,443	9	854,977	1,030,275	1,092,654
食塩	1,181,268	※10	987,724	938,613	797,541
量表・莫座	862,025	11	993,453	822,773	890,834
菓子類	751,593	12	865,131	—	—
取卸薄荷	725,042	13	384,084	121,422	265,116
紡績絹糸	700,000	※14	306,000	990,000	970,000
西洋紙	643,608	15	547,539	531,611	114,270
機械製麦粉	561,416	16	435,790	455,136	329,904
煉瓦	518,380	17	506,336	215,522	347,062
和紙	462,111	18	474,328	484,213	492,271
木製品・下駄	424,516	19	334,920	—	—
素麺	396,050	20	655,583	557,981	434,450
瓦	292,211	21	304,466	248,929	212,324
罐詰	271,352	22	146,437	51,671	94,661
乾饅飩	239,622	23	166,407	169,504	65,307
造船	135,221	24	109,485	73,852	82,827
帽子	134,254	25	93,946	—	—

注) 1. ※印の紡績綿糸と紡績絹糸とは工場毎に計算した概算額の合計であり、9工場の複数番手がある綿糸は大きめであろう。食塩は水産物から。

2. 1913年の生産価額(円)の順位で記した。莫座と下駄とは類似品に合算したが、いずれも10万円台であった。刻煙草(官営)の428,892円と撚糸の230,929円はこの表に載せなかった。造船の前半は新造漁船概価。

出所) 岡山県『大正二年 岡山県統計書』を中心に該当年次の統計書など。

前述の理由から生産価額の数値がやや過大となっていると思われる（『岡山県統計書』に記載されている業種別の絹綿糸紡績工場の生産価額の数値と比較すると、9工場あってしかも各工場の生産番手の平均単価から計算せざるを得ない紡績綿糸の方がおそらくやや大きい数値の概算となっているであろう）ことを差し引いて考えても、この時期の岡山県の主要工業製品の生産価額の第1位は紡績綿糸であるとしても決して誤りではないであろう。1911年と1913年とはやや減少していると概算されるものの、1907年からの他の工業製品との生産価額の差は著しく大きいし、とくに1913年の生産価額の増加には注目できる。綿糸紡績につぐ第2位は岡山県では織物類の中で圧倒的な部分を占めている綿織物であり、とくに1911年と1913年との急増によって清酒を追い越したのである。それに対して清酒は、1913年はかなり増加しているものの1907年から1909年と1911年にかけて停滞していたために、1911年から第3位に後退している。この紡績綿糸・綿織物・清酒の岡山県の工業製品の最上位3品目の1913年の生産価額は、それ以前の1907・1909・1911の各年の生産価額と比較すると、一直線ではないものの明らかに増加しているといっても良いであろう。

最上位3品目につぐ11位までの工業製品で1907年から1913年まで比較的順調に生産価額を増加させていて順位も上昇傾向にあったのは、1913年に第5位（1907年は第9位）を占めている醤油と第10位を占めている食塩（1907年はおそらく第12位？）とであった。1907年と比較すると1913年は生産価額が大きくなっており順位も上昇しているが、1909年と1911年とを含めて考えると生産価額の変動に（そして順位の方でも）注意する必要があるのは、1913年に第6位（1907年も第6位）にある生糸と第7位（1907年は第8位）にある足袋と第9位（1907年は第7位）にある人造肥料であった。そして順位は1907年と同じであったものの生産価額が停滞・減少傾向にあったのが、1913年の第4位の花蒔と第11位の畳表・莫莖との藺草を主原料とする農産加工品であり、生産価額だけでなく順位も1907年の第5位から1913年の第8位に後退させているのは裸麦の麦わらを主原料とする麦稈真田であり、これらはいずれも県南部を中心に生産されている農産加工品であった。

1913年に生産価額が12位以下であった一部の工業製品はとくに1907年と1909年との数値の記載がないものもあり厳密なことはいえないが、1913年の主要工業製品の最上位3品目の中の綿織物と同様に1907年から1913年にかけて（奇数年のみであるが）途中の減少もなく比較的順調に生産価額を増加させていたのは、1913年に第5位の醤油と第10位の食塩と第15位の西洋紙とであり、表4の25品目の中で意外と少ない4品目のみであった。もっとも1907年から1913年までの6ヵ年という短い期間であり、しかも日露戦争の後で第1次世界大戦の前という日露戦後経営という必ずしも好況が続いた期間ではないものの比較的平穏な時期であったためか、岡山県の主要な工業製品の中では多少の順位の変動は見られるものの極端な生産価額の減少や順位の後退は見られなかったといえよう。

## 5. 1913年の主要工業郡市の工業製品

ここでは表2と表3とを中心としたこれまでの考察と『大正二年 岡山県統計書』に記載されている工業製品の郡市別の生産価額とに基づいて、1913年の岡山県全体と岡山市・児島郡・浅口郡・都窪郡・小田郡・上道郡の主要工業6郡市との生産価額第7位までの食塩も含めた主要工業製品などをま

表4 1913年の主要郡市別主要工業製品生産価額の順位と県内比率

主要郡市名	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位	第6位	第7位	工業生産価額 県内比率
岡山県 生産価額	※紡績綿糸 16,062,000	綿織物 8,141,568	清酒 6,049,438	花菱 2,786,749	醤油 1,710,224	生糸 1,438,468	足袋 1,375,048	8位麦稈真田 9位人造肥料 10位食塩
岡山市 生産価額 (県内比率)	※紡績綿糸 4,948,000 (30.8)	綿織物 2,948,247 (36.2)	※紡績絹糸 699,763 (100.0)	菓子類 501,107 (66.7)	※刻煙草 295,122 (68.8)	清酒 294,030 (4.9)	醤油 120,819 (7.1)	①21.6%
児島郡 生産価額 (県内比率)	※紡績綿糸 1,360,000 (8.5)	織物雑類 1,287,786 (99.9)	綿織物 1,263,392 (15.5)	人造肥料 1,084,247 (85.5)	※食塩 958,759 (81.2)	清酒 677,035 (11.2)	足袋 557,040 (40.5)	②14.4%
浅口郡 生産価額 (県内比率)	※紡績綿糸 3,512,000 (21.9)	麦稈真田 859,573 (66.6)	清酒 619,828 (10.2)	機械製麦粉 312,492 (55.7)	素麺 281,010 (71.0)	足袋 263,566 (19.2)	花菱 244,969 (8.8)	③12.8%
都窪郡 生産価額 (県内比率)	※紡績綿糸 3,577,000 (22.3)	花菱 1,005,747 (36.1)	綿織物 500,762 (6.2)	畳表・莫座 452,038 (52.4)	足袋 206,615 (15.0)	撚糸 206,522 (89.4)	清酒 133,859 (2.2)	④12.5%
小田郡 生産価額 (県内比率)	※紡績綿糸 1,604,000 (10.0)	綿織物 308,955 (3.8)	取卸薄荷 277,500 (38.3)	麦稈真田 257,538 (19.9)	清酒 186,789 (3.1)	鐘詰 134,000 (49.4)	生糸 131,098 (9.1)	⑤7.0%
上道郡 生産価額 (県内比率)	綿織物 1,171,929 (14.4)	※紡績綿糸 1,060,000 (6.0)	醤油 154,632 (9.0)	西洋紙 141,900 (22.0)	清酒 133,668 (2.2)	花菱 48,841 (1.8)	生糸 47,756 (3.3)	⑥5.6%

注) 1. 1913年の工業生産価額の上位6位までの郡市の主要工業製品の生産価額とその県内比率とを示した。※印の紡績綿糸と紡績絹糸は工場毎に計算した概算額によるものであり、刻煙草は県南部の官営工場分を岡山市分とした。食塩は水産物から追加した。

2. 生産価額の単位は円であるが紡績綿糸は複数番手があるので千円にまらめた。比率は%。

出所) 岡山県『大正二年 岡山県統計書』

とめて表4を作成して、それを中心として考察する。表3と同様に紡績綿糸と紡績絹糸(屑生糸・屑繭など屑物の絹繊維を短繊維にして紡績したものである)とは工場毎に計算した概算額によるものであり、官営工場による刻煙草は岡山市と真庭郡で生産されていて御津郡にあった事業所は従業者数から葉たばこ取扱(収納)所で生産工場ではないであろうと推測した。

岡山県全体で間違いなく第1位を占めていると概算額の生産価額であることを考慮しても判断できる紡績綿糸は、上道郡では綿織物に僅かに及ばず表4では第2位と判断しているものの、その他の五つの郡市では第1位を占めていると判断できるし、とくに岡山市・都窪郡・浅口郡での生産価額が多かったようである。そして岡山県全体で第2位の生産価額を占めている綿織物は、浅口郡では主要工業製品7品目にとつてい含まれないほどごく僅かであったものの、その他の五つの郡市では1~3位

を占めていてとくに岡山市での生産価額が多かった。また綿繊維系の製品と思われる織物雑類は、ほとんど100%に近い生産価額が児島郡に記録されていて児島郡では綿織物よりも僅かに多かったのである。このように多少の差異はあるものの、岡山県の主要工業6郡市の工業製品の最上位の部分は綿繊維系の紡績綿糸・綿織物・織物雑類が占めていて、それらの生産価額合計は6郡市のすべてで工産物価額の過半数を占めていただけでなく岡山市と上道郡では7割前後という驚くべき大きな比率を占めていたのである(表2も併せて考察した)。

岡山県全体の生産価額で第3位の清酒は、紡績綿糸のように大きな生産価額ではなかったものの同様に主要工業6郡市のすべてで第7位までの主要工業製品として登場しているとともに、児島郡と浅口郡との生産価額はその他の郡市の2倍以上あり県内比率も両方とも10%を超えていた。それに対して同じ醸造業製品でも岡山県全体の生産価額第5位の醤油は、表4の6郡市では岡山市と上道郡だけしか載っていないが、これは生産価額が県内で最大の生産地で25%を占めていた児島郡をはじめ浅口郡や都窪郡で第7位までの主要工業製品に含まれなかったためであった。

岡山県全体の生産価額で第4位の花菱は、都窪郡が県内最大の産地であり表4には浅口郡と上道郡とでも各郡市の第7位までの主要工業製品として載っているが、県内では吉備郡と御津郡とが都窪郡について多かったのである。同じ藺草製品の畳表・莫蔭は岡山県全体での生産価額が花菱の三分の一程度で1913年では第11位であり、表4では県内最大の産地である都窪郡だけに登場しているものやはり吉備郡や浅口郡でも比較的多かったのである。

岡山県全体の生産価額で第6位の生糸は、表4では小田郡と上道郡との第7位に登場しているだけであるが、岡山県内での主要な産地は県北の東部から中部の美作地方の苫田郡・英田郡・真庭郡と県西部の後月郡などであり、それらの郡では小田郡よりもはるかに多い生産価額を示していた。それに対して生産価額で第7位の足袋は、対照的であるといつていいほど児島郡を中心に浅口郡・都窪郡などの生産価額が多く県内比率で8%強の岡山市も含めると圧倒的に県南中央部が多くなっていて、県北部では苫田郡が岡山市程度あったにすぎなかった。

生産価額で一つの郡市が岡山県全体の過半数を占めているいわば各郡市の特化的な工業製品と言っても良いような1913年の製品は、岡山市では紡績絹糸・菓子類・刻煙草で、児島郡では織物雑類・人造肥料・食塩で、浅口郡では麦稈真田・機械製麦粉・素麺で、都窪郡では畳表莫蔭・撚糸で、いずれも岡山県全体の生産価額では第7位までには含まれていなかったもののほとんどがそれにつぐような位置を占めている主要な11品目であった。

表1から表4までを中心として1913年の岡山県の工業生産の特徴をおおまかにまとめてみると、第1は主要工業6郡市のうち県南西部の小田郡を除いた県南中央部の5郡市(岡山市・児島郡・浅口郡・都窪郡・上道郡)だけで県内工業生産価額の約三分の二という圧倒的な比率(66.8%)を占めていて、県内の半分を僅かに下回っている産業総価額の比率(49.3%)よりもかなり大きな割合を占めていることはもちろんのこと、県内の三分の一を割り込んでいる農業生産価額の比率(32.2%)とはまさに対照的ともいえる割合を占めていることである。第2にそれは紡績綿糸(上記の5郡市が県内生産価額で占めている比率が90.0%)と綿織物(同様に72.7%)という当時の岡山県を代表する工業製品によることはもちろんであるが、生糸以外の足袋(同様に83.7%)や撚糸(都窪郡が89.4%)や



織物雑類・紡績綿糸（両方とも5郡市で100%）といった繊維製品による部分が決定的な役割を果たしていることである。

第3に繊維製品以外では、菓子類・刻煙草・人造肥料・食塩・麦稈真田・素麺などの5郡市の特化的な工業製品も県内の生産価額の三分の二以上を占めていてそれに寄与していることも看過してはならない。第4は以上の主要工業製品の中で倉敷地域が生産価額で県内の過半数を占めているのではないかと推測できそうな工業製品は紡績綿糸・織物雑類・食塩・足袋・花菱・畳表・莫塵の6品目くらいであり、人造肥料・麦稈真田・素麺・撚糸などのようにこの時期の児島郡・浅口郡・都窪郡の比率が高くなっていても倉敷地域に属する地域内に含まれている部分が多いとは必ずしも確信を持って言えない品目もあった。

## 6. むすびにかえて

この時期の日本の工場制工業でみた岡山県の工業構成の状態については、すでに岡山県史編纂委員会による『岡山県史第十巻 近代I』（1986年刊行）で「第五章 明治後期の産業と経済」の「第二節 在来産業の推移」の「一 在来産業の展開」（神立春樹担当）の中の「明治後期の工業構成」の項目で『明治四十二年 工場統計表』に基づいて全国の工業構成と比較した特徴を整理されているので、そこから本稿と直接関連が深い工場生産額構成の部分だけを引用しておこう。

岡山県（の生産額でみた部門別構成）はそれぞれ、染織六九・二％，機械器具〇・五％，化学一・三％，飲食物九・〇％，雑七・一％，特別二・九％，となっていて、染織の抜群の大きさ，機械器具の著しい小ささをその特徴とみることができ。圧倒的なウェイトを占めるこの紡織（染織であろう一筆者）のなかでは製糸（四・一％），織物（一一・八％）が小さく，紡績のみで五一・九％という圧倒的な大きさである。（中略一筆者）。すなわち，この年（1909年一筆者）の岡山県の工業は一方には大規模紡績工場の屹立，他方にはそれと対照的（多数の零細一筆者）な蘭苳（一・五％），麦稈及経木真田（〇・六％）などの雑工業の（生産額の構成比では全国平均をやや下回るものの一筆者）広汎な存在があり，このほかに織物，製糸，それに化学のなかの窯業が展開しているのである。ただし織物は工場としてとらえられるものへの転換が始まったころであり，工場構成上の後年のごときウェイトとなるのはこの時期以降である。

復刻版が1962年に慶応書房から発行されたこの第1回の『明治四十二年 工場統計表』には「本表ハ平均一日職工五人以上ヲ使用スル工場ノ製産額ヲ調査ス」と記されているように，岡山県の紡績綿糸（『工場統計表』での生産額は10,137,071円で『岡山県統計書』からは11,244,000円と概算）や紡績綿糸（前者では915,047円で後者から990,000円と概算）のように全生産額がそうした工場による場合はこの全国版の『工場統計表』の岡山県の項と一致することになるはずであったが，（『岡山県統計書』には生産額が記載されていなかったので工場毎の生産量と生産番手当りの平均単価などから概算額を計算したために）筆者が結果的には実際よりもやや大きめの金額を算出してしまうこととなったものの，花菱（前者では311,777円で後者では3,152,434円と大差があり）や畳表・莫塵（前者では両方とも0円で後者では822,773円でやはり差が大きい）の蘭苳業（前者では311,777円で後者では

3,975,207円という大差が出た)や麦稈経木真田業(前者では63,010円で後者では2,112,959円という大差が出た)はいうまでもなく生糸製糸業(前者では882,055円で後者では1,178,750円と差がある)や綿織物(前者では2,405,687円で後者では4,039,166円とやはりかなりの差がある)を主力とする織物業(前者では2,515,566円で後者では4,636,965円と当然ながらかなりの差がある)などもこの「工場」に含まれない零細規模の生産場が著しく多かったために、1909年の『工場統計表』の岡山県の工場生産額が21,304,892円であるのに対して『岡山県統計書』の工産物価額は35,194,764円とその1.65倍もあったのである。

このことから考えると、第2回の『工場統計表』は大正三(1914)年に実施されているので兩年の全国版の統計表を考察することによって第一次世界大戦前の岡山県の工業生産の状態をある程度特徴付けることは可能であろうが、郡市別にも集計されていて多数の零細な生産場を含めている『岡山県統計書』の方が、まだそうした零細な生産場が多く業種で主力を占めている部分の検討はいうまでもなく、全体としても生産額でも相当大きな割合を占めていた第一次大戦前の岡山県の工業生産の状態をより正確で具体的な状態に近い数値から検討することが可能であるように思われた。

#### 【参 照 文 献】

岡山県『大正二年 岡山県統計書』1914年。

倉敷市『新修倉敷市史 第6巻近代(下)』2004年。

岡山県『明治四十四年 岡山県統計書』1912年。

岡山県『明治四十二年 岡山県統計書』1910(?)年。

岡山県『明治四十年 岡山県統計書』1908年。

森元辰昭「旧加茂葉たばこ取扱所(現、吉備中央町加茂川民俗資料館)」(岡山県教育委員会『岡山県の近代化遺産—岡山県近代化遺産総合調査報告書』95頁所収)2005年。

山陽新聞社『せとうち産業風土記』1977年。

神立春樹「在来産業の展開」(岡山県『岡山県史 第十巻近代I』所収の489-491頁)1986年。

農商務省『明治四十二年 工場統計表』1911年(この第1回の復刻版は慶應書房が1962年に刊行)。

農商務省『大正三年 工場統計表』1916年(この第2回の復刻版も同社が1963年に刊行)。